

集会宣言 平和はたたかいとるもの

今年、夏の甲子園は100回目だ。被爆73年目の8月9日の長崎原爆忌に、偶然にも長崎の高校球児が、甲子園で黙とうし、実際に対戦をする。選手宣誓でも「野球ができる平和の幸せ」といったが、いったい平和とはなにか。

過去、この大会は戦争で4年間も中止されたが、実は100年前の1918(大正7)年にも米騒動で中止があった。だが、この理由は歴史の一面である。内面では、この年、朝日新聞が「軍部批判」を理由に、国から発刊停止とされ、編集者も社を追われる。また軍閥内閣と一体の右翼が朝日新聞社を襲撃し、社長も負傷し、辞職し、また社も反省の社告を迫られた。いわゆる白蛇事件と呼ばれるが、朝日も廃刊の危機のなか、野球どころではなかったのだ。

だが政治的には、これはただの護憲・新聞社へのテロ攻撃ではなく、大正デモクラシー＝民主主義の復権を嫌う国と軍部、右翼らの言論弾圧であり、国の行方を決める大事件で、その後、朝日も翼賛紙と化し、日本は戦争へと転がる。

平和は二つある。一番は外と戦争をしない国であり、内には国民の基本的人権が保障され、自由に生きられることだ。この二つがあってこそ真の平和だ。

さきに来日したドイツの哲学者・ガブリエルは、「人の尊厳が国の基本」＝ドイツの戦後・憲法の第一条をあげ、「たとえ国民の95%が賛成してもユダヤ人を殺してはならない」とする。平和とは外にも内にも尊厳を共有する社会なのだ。

日本について彼は、国民の従順性や整然とした社会の秩序を「抑圧の反証」だとする。こうした過度な抑制＝秩序と競争により、国民の中の弱者は、格差に苦しみ、心を病み、社会から脱落し、国全体も息苦しさで閉塞感が覆う。

確かに甲子園では100回記念大会で若者のプレーが続くが、政治的には100年前と酷似し、安倍内閣や保守派が、新聞社やテレビ局を偏向だ、免許取り消しだ、と攻撃する。日本はいま平和で自由なのか。沖縄の辺野古では反基地の人々が蹂躪され、福島原発事故はいまも被災が続き、広島、長崎の被爆者は、いまも苦しんでいる。内なる国民の平和は脅かされている。

戦争の時代から再生した戦後日本の平和も、若者がいう野球ができるいまの幸せも、戦後世代のたたかいによるものが大きい。わたしたちは明日もまたたたかい続けて、若者世代に平和の国・日本をバトンタッチしたい。

2018年8月8日、第22回、8・8平和を考える長崎集会